The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	言語行動としての罵り : 日本語と中国語の罵り表現の対照から
Author(s)	浜田, 麻里
Citation	待兼山論叢. 日本学篇. 1988, 22, p. 77-93
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/56467
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

言語行動としての罵り

── 日本語と中国語の罵り表現の対照から ──

浜　田　麻　里

0　はじめに

悪口（わるくち）を攻撃行動として捉える。そして、中でもその攻撃性が最も直截的であると考えられる「罵り」に焦点をあて、日本語と中国語の罵り表現を比べることを通して、日本語と中国語の罵りの違いについて考える。

1　悪口について

まず、罵りの上位概念である悪口について考察を加える。

星野(1974)は、個人、集団、社会の各レベルでの悪態の諸機能について述べている。ここでは個人のレベルでの言語行動に限定し、この種の言語行動を「悪口」として定義し直して、その特徴を考える。

1-1　悪口の定義

悪口ということばには、類義語として、悪態、悪口雑言、罵倒語、罵詈讒謗などがあるが、ここではそれらを総称するものとして、「悪口」という言葉を用いる。そして「悪口」を「対象の持つマイナス面に言及するか、あるいは、マイナスの評価を付し、対象を攻撃する言語行動」と定義する。悪口という言語行動の関与者としては、話し手、聞き手、悪口の対

象の三者が存在する。悪口の聞き手と悪口の対象は必ずしも一致しない。悪口の中で、聞き手と対象が一致している場合、つまり、面と向かって相手に悪口を言う言語行動を「罵り」として、区別する。聞き手と対象が別であるものは「陰口」とする。

1-2　悪口の機能

先に、悪口を一種の攻撃行動として定義した。しかし、悪口には、攻撃のほかにもいろいろな機能が観察される。一例として、罵りでは、互いに罵り合うことにより、話し手と聞き手の間を近付ける場合がある。また、陰口では、話し手と聞き手との間に連帯間を生じさせるものがある。また、友人間での遊戯的罵りや男女間の嬌態としてのそれなどは、攻撃というより、好意の表現として捉えられる。星野（前掲）はこれらを「集団の中の個人を結び付ける機能」としている。

しかし、悪口におけるこのような機能は、相手に攻撃を加えることと同列に置いて考えるべきではない。例えば、罵りの場合、罵りを許容する、ということが聞き手の話し手に対する特別な寛容さを意味する。罵りが行なわれるとき、話し手は聞き手のこの寛容さを当然のこととして、期待している。そのため、悪口が好意を含意する、ということになるのであって、これは間接的な行動である。直接的には、攻撃の形をとっている。

よって、ここでは、悪口の直接的行動はあくまで攻撃であるとし、その他のさまざまな行動は、間接的行動と考える。そして、直接的行動、すなわち、攻撃の面から、悪口の特徴を探ることにする。

1-3　悪口とほめ言葉

さて、「悪口」と対立する言語行動は何か、というと、「ほめ言葉」ということになるだろう。まず、悪口とほめ言葉を比較することから、悪口の

性質を考えてみよう。

悪口の定義を基に、ほめ言葉を定義すると「対象の持つプラス面に言及するか、あるいは、プラスの評価を付し、対象を持ち上げる言語行動」ということになる。[1] しかし、悪口とほめ言葉は、評価の方向性よりも、もっと根本的な点で異なっている。それは、ほめ言葉は聞き手の存在を前提とするが、悪口は聞き手がいなくても成立するという点である。だれも聞いてくれる人がいなくても、独語でも、心内語でも「悪口」は言えるのである。例えば、某テレビCMで

> 人が苦労してとって来た仕事を自分の手柄にしやがって、このサギとり課長！

などと、叫んでいた人がいたが、これなど、聞き手の存在しない、典型的な例だろう。かえって、聞き手がいないからこそ、言えるのではないか。

また、罵りの中には「畜生！」「くそったれ！」のように、特定の聞き手に向かって言っているのか、聞き手が存在しないのか、はっきりしないようなものもある。そればかりか、悪口の対象すら確定できない場合もある。

ほめ言葉はどうか。ほめ言葉の場合には聞き手のいないような場面でほめ言葉を言う、というのは考えられない。誰も聞いていないときに「あの人、頭がいいなあ。」と言ったら、それはほめていることにはならないのではないか。「感嘆」とか「詠嘆」と呼ぶべきではないだろうか。ほめ言葉では、話し手自身以外の誰かに聞いてもらうことが必要なのである。一方、悪口は、発話することに大きな意味がある。聞いてもらうことは副次的なのである。極論すれば、悪口は聞き手の存在を必ずしも必要としない。このことは、悪口とほめ言葉の決定的な違いである。

悪口にのみ聞き手を前提としない場合があることには、悪口の「反社会

性」という性質が大きく関与している。広く知られているように、悪口という言語的攻撃を行なうことによって、カタルシスが起こる。悪口が反社会性を持つことと、カタルシスを成立させることは、同じ事実の別の二面である。また、反社会的な行動を行なう時には、当然、社会的に摩擦が起こる場合が多い。悪口というのは対社会的には危険な行動である。その危険を少しでも減らすためには、聞き手が存在しないことほど好都合なことはない。

反対にほめ言葉では聞く者がいることによって、話し手が何らかの利益を期待するのが普通である。だから、聞き手が存在しないと、ほめ言葉は機能しない。

悪口の性質としてはこのように「反社会性」が重要なことがわかった。

1-4　悪口の反社会性

では、悪口の反社会性という性質は、具体的にどのような形で悪口の中に観察されるのであろうか。いくつかの面から、反社会性を考えてみる。

一般に、攻撃行動は反社会的行動の一部である。したがって、反社会性は攻撃性を含む概念であるということになる。悪口が攻撃を行うこと自身が、反社会性の第一の現れである。

しかし、悪口が反社会的であるのは、その攻撃性のためばかりではない。現実の悪口の表現には性や神のタブーに関係のある表現が多い。悪口の迫力の一部は、タブーを犯すことから来ていると考えられる。各々の言語において、何がタブーになっているか、という点は、言語の差異が大きく反映している部分である。

また、とくにタブーに触れないような悪口でも、言語使用の規則としては、普通、その使用は禁じられている。だから、実際に悪口を言う時にはその規制を破ることになる。規制を破る快感が、悪口を成立させる一つの

要因になっているのである。

このように、悪口では、その言語の中でどんなものを口にすることがタブーか、言語使用の規則が何を規制するか、ということが非常に重要である。つまり、悪口は言語によって、差異が大きい部分なのである。二つ以上の言語の悪口を対照する、という視点から、悪口の言語行動としての実態を明らかにすることは、言語の特徴の軽視できない部分を探ることになるのではないか。

以上のようなもくろみで、日本語と中国語の罵りを対照し、それぞれの特徴を明らかにしていく。罵りを取り上げたのは、罵りが面と向かっての攻撃であり、最もその反社会性が明確に現れると考えるからである。とくに、罵りの反社会性の面に焦点をあて、各々の特徴を調べる。手段として、日本語と中国語の話者に対するアンケート調査を用いた。以下、その結果を分析する。

2 調査の概要

日本語と中国語の罵りの言語行動としての特徴をさぐるため、日本語話者と中国語話者にアンケート調査を行った。

調査は1987年9月から1988年2月にかけて、大阪と京都で実施した。アンケートの回答者は以下の通りである。

日本語話者　86人（学生及び社会人）

中国語話者　79人（留学生及びその家族、中国帰国者）

年齢は18歳以上、男女構成はほぼ 1：1 になった。

また、調査に用いた罵り表現は、日本語、中国語、それぞれ7表現である。

日本語

あほ、ばか、まぬけ、死ね、のろま、おまえの母さんデベソ、どじ

中国語

他媽的（母親の[2]）、混賬（ろくでなし）、王八蛋（すっぽんの卵）、狗娘養的（犬の母親に育てられた者）、婊子（売女）、神経病（きちがい）、雑種（雑種）

〔（　）内は逐語訳〕

1987年6月～7月に、日本語話者36人、中国語話者26人に予備調査を実施し、「知っている罵り言葉を書いてください」ともとめた。本調査に用いた表現はこの予備調査の設問に対して得られた回答から、日本語と中国語において、誰もが知っている、典型的な罵り表現として、出現頻度の高かったものを順に採ったものである。[3]（但し、差別語と思われるもの、「でぶ」「ぶす」のように対象がかなり限定されるものは除いた。）

よって、このアンケートの結果は、数少ない表現から得られたものではあるが、ある程度は各言語の特徴を明らかにするものと考えられよう。

以下、アンケートの回答に即して、五つの面から、日本語と中国語の罵り言葉の性質を考えていく。五つの面とは、

1　規制 ── 前節で取り上げたように、社会において、どのくらい規制を受けているのかをみる。「使ってもかまいませんか、使うべきではありませんか」という問いと、「良い言葉ですか、悪い言葉ですか」という問いの二つがある。

2　攻撃性 ── 反社会性の一部である攻撃性について、さらに詳しく調べる。攻撃する側の情報は、回答者が答えにくく、回答に信頼性が薄い。そこで、より調べやすい、攻撃される側の語感を探った。「こういうことを言われたら気にするか」「どれくらいショックを受けるか」などはこれに関するものである。とくに、どのような種類の攻撃が行なわれるのかを知るため、言われたときの気持ちは、「悲しくなる」「腹が立つ」「侮辱さ

れたと思う」の3つがそれぞれ当てはまるかどうかを尋ねた。

3　文字通りの意味で使われるかどうか――罵り言葉にはタブーに触れるような概念的意味を持つものが多いが、概念的意味がそのまま生きている場合もあれば、かなり定式化が起こって、概念的意味が薄れている場合もあるだろう。設問「文字通りの意味で使われますか」で、原義の意識のされる程度を聞く。

4　使用頻度――「こういうことばはよく使われているか」を尋ねた。

5　イメージ――それぞれの罵り言葉は一体どんなイメージを持たれているのか。特に、好ましいイメージかどうか、という観点から見ていく。

一般に、罵り言葉とされる表現は、好ましくないイメージが強いことが予想される。一口に好ましくないイメージが強いと言っても、どのようなイメージなのか。好ましくないイメージの形容語「冷たい」「卑猥な」「生気のない」「下品な」といった感じがあてはまるかどうかを調べた。また、しかし、前述のように、罵り表現は表面的には攻撃行動であるが、間接的には好意の表現であるような行動に用いられることがある。表現によって、好意の表現としての罵り行動に用いられる可能性の多少に違いはないだろうか。好意の表現として使われることが多ければ、好ましくないイメージが強くないか、あるいは、好ましいイメージを与えることも考えられる。好ましいイメージの形容語「ユーモラスな」「親しみがある」「健全な」「生き生きした」「上品な」の感じがあてはまるかを尋ねた。

アンケートでは以上の質問項目において、それぞれ1～4の各側面と5の「嫌い」については1～5の五段階、5の「イメージ」については三段階の尺度を設定し、日本語、中国語それぞれの話者に判定を求めた。

これから、主に各項目の平均を基に、考察を進めていく。

3　調査結果と考察

3-1　規　　制

規制に関する「使うべきではない」「悪い言葉である」の２項目の回答を見てみよう（表１）。

中国語の表現では「神経病」「他媽的」以外、４以上の値が得られ、規制がかなり強いことがわかる。日本語の７表現の中では「悪い言葉」度が強かったのは「死ね」であり、「使うべきではないか」という規制の強さでも「死ね」が最高である。次に、この二つの項目の回答を比べて見てみよう（表１）。「悪い言葉」よりも、「使うべきではない」のほうが得点が低いものが多く、中国語の「王八蛋」と日本語のすべての表現で、その差は有意である。

つまり、「王八蛋」や日本語の多くの表現では「悪い言葉」という反社会性は強くても、罵り行動に使われるときは、時と場合によって規制が弱まる。一方、中国語のその他の表現と「死ね」では反社会性の強さに応じて、規制も強い。悪い言葉はどんな条件下でも使うべきではない、と考えられている。

3-2　攻 撃 性

攻撃性に関係のある項目の結果は表２の通りである。

日本語の表現では「死ね」が最も攻撃性が強く、中国語では「狗娘養的」「婊子」「雑種」などが攻撃性が強いようだ。

日本語と中国語の表現を全体として比較してみると中国語のほうがはるかに値が高く、日本語の中で最も強いショックを与える「死ね」でも中国語の中で最も弱い「神経病」に及ばない。ここに現れた中国語の表現は、

（表1）「規制」

	死ね	ばか	のろま	あほ	どじ	まぬけ	デベソ	狗娘養的	婊子	雑種	王八蛋	混賬	他媽的	神経病
使うべきでない	4.26	3.42	3.35	3.07	3.14	3.12	3.43	4.83	4.84	4.78	4.37	3.20	3.71	3.28
	(1.23)	(1.24)	(1.17)	(1.27)	(1.23)	(1.22)	(1.42)	(0.46)	(0.46)	(0.60)	(0.98)	(1.06)	(1.41)	(1.45)
悪い言葉	4.77	4.18	3.97	3.93	3.78	3.95	4.05	4.82	4.80	4.69	4.49	4.33	4.02	3.53
	(0.48)	(0.74)	(0.79)	(0.76)	(0.82)	(0.78)	(0.81)	(0.43)	(0.52)	(0.76)	(0.69)	(0.84)	(0.89)	(1.05)
2項目のt値と	−4.02	−6.54	−5.62	−6.94	−4.73	−6.68	−4.36	−0.77	0	0	−1.80	−0.11	−0.90	−1.80
有意差	**	**	**	**	**	**	**							

〔（　）は標準偏差。*、**はそれぞれ5％，1％の有意水準を表す。以下の表はすべて同様。〕

（表2）「攻撃性」

	死ね	ばか	のろま	あほ	どじ	まぬけ	デベソ	狗娘養的	婊子	雑種	王八蛋	混賬	他媽的	神経病
気にする	3.61	2.84	3.07	2.59	2.66	2.84	1.92	4.65	4.60	4.56	4.39	4.37	3.65	3.48
	(1.32)	(1.24)	(1.16)	(1.27)	(1.20)	(1.21)	(1.23)	(0.85)	(1.02)	(1.04)	(1.02)	(1.05)	(1.42)	(1.54)
ショック	3.57	2.76	2.87	2.81	2.64	2.60	1.99	4.60	4.41	4.37	4.20	4.12	3.47	3.36
	(1.32)	(1.22)	(1.17)	(1.23)	(1.13)	(1.14)	(1.31)	(0.86)	(1.04)	(1.06)	(1.07)	(1.18)	(1.48)	(1.35)
悲しくなる	3.54	2.92	2.95	2.73	2.70	2.58	2.25	2.42	2.45	2.40	2.54	2.44	3.53	2.90
	(1.38)	(1.20)	(1.22)	(1.25)	(1.24)	(1.13)	(1.31)	(1.69)	(1.70)	(1.65)	(1.50)	(1.60)	(1.49)	(1.45)
腹が立つ	3.81	3.37	3.08	3.19	2.89	3.14	2.42	3.73	3.50	3.76	3.64	3.55	3.37	3.16
	(1.28)	(1.28)	(1.23)	(1.37)	(1.33)	(1.23)	(1.40)	(1.63)	(1.68)	(1.59)	(1.55)	(1.58)	(1.44)	(1.46)
侮辱された	3.69	3.38	3.34	3.30	3.13	3.05	2.58	4.00	3.82	3.00	2.66	2.50	3.22	3.28
	(1.30)	(1.91)	(1.17)	(1.28)	(1.20)	(1.15)	(1.44)	(1.59)	(1.68)	(1.52)	(1.49)	(1.53)	(1.53)	(1.42)

いずれも日本語より強い攻撃性を持つ。

では、攻撃の中身はどうか。「腹が立つ」「侮辱されたと思う」は平均にほとんど差が見られず、また、中国語の表現のほうが、やや高得点になった。「悲しくなる」は中国語のすべての表現と日本語の「死ね」以外の表現では3以下で、言われたとき、あまり悲しい気持ちにはならないようだ。なお、「神経病」は「悲しくなる」は数値が高いが、他の項目はそれほど高くない。また、「悲しくなる」に関して、日本語と中国語を比較すると、「おまえの母さんデベソ」以外では、中国語の表現より、やや、数値が高い。「悲しくなる」ということと、他の感情は、別々に考えたほうがよさそうであることがわかる。罵りの攻撃には大きく分けて、2種類あるようだ。

3-3　文字通りの意味で使われるか

結果は表3。

中国語では「狗娘養的」「婊子」「雑種」など、強く規制されている、攻撃性の強い表現では、性に関係があるとか、対象の血統を卑しむという概念的意味が強く意識されている。但し、「他媽的」のようによく使われるものでは原義はあまり意識されないようだ。日本語の中では「のろま」「どじ」「まぬけ」「ばか」「あほ」が3以上で、「文字通りの意味で使われている」と言える。すなわち、現実に対象が「のろま」とか「どじ」とかいう表現に該当する状況でないと、使いにくい、ということである。

3-4　使用頻度

「これらの表現はよく使われているか」という質問項目に対する結果を表4に掲げる。日本語の「おまえの母さんデベソ」は子供が使う、ということで使用が限定され、使用頻度が低い。よく使われるものは「あほ」

（表3）「文字通りの意味で使われるか」

	死ね	ばか	のろま	あほ	どじ	まぬけ	デベソ	狗娘養的	婊子	雑種	王八蛋	混賬	他媽的	神経病
文字通りだ	2.11	3.07	3.86	3.07	3.73	3.46	1.25	1.53	1.50	1.82	2.33	2.55	3.63	3.31
	(1.16)	(1.14)	(0.95)	(1.16)	(1.05)	(1.06)	(1.55)	(1.90)	(0.90)	(1.20)	(1.33)	(1.42)	(1.40)	(1.45)

（表4）「使用頻度」

	死ね	ばか	のろま	あほ	どじ	まぬけ	デベソ	狗娘養的	婊子	雑種	王八蛋	混賬	他媽的	神経病
よく使う	3.11	4.10	3.11	4.51	3.96	3.50	2.39	3.20	3.41	2.96	2.52	3.02	2.43	2.79
	(1.20)	(0.97)	(1.14)	(0.83)	(0.98)	(1.07)	(1.28)	(1.54)	(1.48)	(1.60)	(1.40)	(1.44)	(1.37)	(1.40)

（表5）「使用頻度」と「規制」「攻撃性」の相関

	悪い言葉	使うべきでない	気にする	ショック
日本語	−0.1864 **	−0.1054 *	−0.0277	−0.1863
中国語	−0.5431 **	−0.5465 **	−0.3942 **	−0.5035 **

「ばか」など、日本のほうに多い。

表4の結果をこれまで考察してきた反社会性、攻撃性、文字通りの意味か、などと突き合わせてみると次のようなことがわかる。

中国語だけでみると、「狗娘養的」「婊子」「雑種」のように、反社会性や攻撃性の強いものは使用頻度が低く、「神経病」のようにこれらの性格が弱いものはよく使われている。それに対し、日本語では使用頻度と反社会性や攻撃性の間に特に関係がない。7表現を合わせた項目間の相関係数でみると、さらにはっきりする（表5）。

どうやら、中国語の7つの表現では攻撃性を含めた反社会性の強さが罵り行動におけるその表現の使われ方を決定する大きな要因になっているようである。日本語では、どんな要因が働くのか。

前節ですでに指摘したが、とくに、「のろま」「どじ」「まぬけ」などの表現が使われるときには、これらの表現があてはまる状況が実際に存在している傾向がある。もしそうなら、これらの表現の使われ方は「のろま」という状況や「どじ」という状況がどれくらい生起するのか、ということに関わっているはずである。[4] 一方で、「ばか」「あほ」のような表現はよく使われ、意味が広く、文字通りの意味で使われるばかりではないことがわかる。

3-5　イメージ

結果を表6に示す。

好ましくないイメージは、規制の強い表現ほど強く、また、日本語の表現より、中国語の表現のほうが概して強いが、「冷たい」という項目だけは例外的である。日本語の表現のほうが中国語より強く、また、中国語でも「神経病」という反社会性の弱いものが最も高い値を示す。また、「生気のない感じ」も日本語の表現のほうが全般に強い。

（表6）「イメージ」

	死ね	ばか	のろま	あほ	どじ	まぬけ	デベソ	狗娘養的	婊子	雑種	王八蛋	混賬	他媽的	神経病
冷たい感じ	2.61	1.98	1.75	1.64	1.60	1.54	1.31	1.27	1.32	1.33	1.36	1.30	1.39	1.59
	(0.66)	(0.78)	(0.76)	(0.76)	(0.73)	(0.70)	(0.58)	(0.62)	(0.67)	(0.69)	(0.69)	(0.64)	(0.69)	(0.82)
卑猥な感じ	1.30	1.07	1.10	1.07	1.12	1.13	1.34	2.11	2.27	2.11	1.66	1.60	1.59	1.37
	(0.64)	(0.30)	(0.37)	(0.30)	(0.40)	(0.38)	(0.63)	(0.90)	(0.87)	(0.91)	(0.86)	(0.81)	(0.82)	(0.73)
生気のない感じ	1.87	1.43	1.88	1.52	1.46	1.82	1.38	1.59	1.50	1.52	1.26	1.21	1.48	1.51
	(0.82)	(0.64)	(0.82)	(0.70)	(0.66)	(0.83)	(0.65)	(0.55)	(0.61)	(0.47)	(0.69)	(0.52)	(0.76)	(0.76)
下品な感じ	2.22	1.71	1.69	1.81	1.66	1.73	1.98	2.33	2.37	2.33	2.21	2.13	2.00	1.50
	(0.83)	(0.69)	(0.72)	(0.78)	(0.70)	(0.71)	(0.84)	(0.91)	(0.88)	(0.88)	(0.87)	(0.82)	(0.86)	(0.70)
ユーモラスな感じ	1.13	1.62	1.86	2.05	1.98	2.16	2.51	1.07	1.64	1.07	1.05	1.14	1.29	1.63
	(0.40)	(0.71)	(0.70)	(0.78)	(0.76)	(0.77)	(0.72)	(0.34)	(0.77)	(0.26)	(0.31)	(0.35)	(0.64)	(0.80)
親しみがある感じ	1.19	1.71	1.87	2.35	2.09	2.05	2.05	1.00	1.02	1.05	1.20	1.20	1.31	1.57
	(0.48)	(0.69)	(0.75)	(0.74)	(0.77)	(0.75)	(0.82)	(0.00)	(0.15)	(0.30)	(0.51)	(0.51)	(0.67)	(0.73)
健全な感じ	1.08	1.62	1.60	1.75	1.75	1.58	1.68	1.02	1.00	1.07	1.17	1.16	1.27	1.44
	(0.31)	(0.79)	(0.70)	(0.78)	(0.78)	(0.76)	(0.84)	(0.15)	(0.00)	(0.26)	(0.49)	(0.42)	(0.67)	(0.76)
生き生きした感じ	1.30	1.54	1.29	1.65	1.57	1.39	1.52	1.00	1.09	1.05	1.19	1.16	1.38	1.35
	(0.64)	(0.70)	(0.62)	(0.79)	(0.72)	(0.75)	(0.77)	(0.00)	(0.42)	(0.22)	(0.50)	(0.48)	(0.68)	(0.61)
上品な感じ	1.06	1.28	1.23	1.13	1.32	1.20	1.03	1.00	1.05	1.02	1.18	1.02	1.16	1.42
	(0.25)	(0.58)	(0.48)	(0.34)	(0.57)	(0.46)	(0.16)	(0.00)	(0.30)	(0.15)	(0.55)	(0.15)	(0.53)	(0.69)

好ましいイメージでは、「おまえの母さんデベソ」がユーモラス、「あほ」が親しみがある感じが強い、という結果がでている。また、中国語の中では「神経病」が総合的に好ましいイメージが強い。これらの表現は間接的行動としては好意的な行動に用いられることが多い、と考えられる。

ところで、「神経病」は好ましいイメージが強いのに、冷たい感じも強い、という一見矛盾した結果になっている。「神経病」は上品な感じが、すべての表現の中で群を抜いて強い。この表現はとくに女性がよく使い、ちょっと軽蔑したような感じで使うようだ。そこから、このような結果になったものと考えられる。

日本語の7表現についても、「神経病」同様、好ましいイメージが中国語よりやや強いが、冷たい感じも強い、という傾向がみられる。

4　日本語と中国語の罵り行動の違い

以上、日本語と中国語の罵り行動に使われる表現の特徴をアンケートの回答から探ってきた。ここで、5つの面をまとめて、日本語と中国語の罵り行動の違いを考える。

一般に、中国語の罵り表現のほうが、反社会性、とくに攻撃性が強い。同時に、攻撃性の強い言葉に対する規制も強い。悪い言葉が条件によって許容度が増すことは少ない。つまり、表現によってどれくらい悪い言葉かのランク付けがはっきりしていて、ランクが上のもの、つまり強烈なものを使えば、攻撃力が強い。しかし、ランクが上である表現は状況がそれに応じたような、ランクが上である時にしか使われない。そのようなことがおこる確率は、ランクが上であればあるほど当然少ない。いずれにせよ、その罵り行動の与える影響の程度はどんな表現を用いるかによってほぼわかる。

日本語では反社会性の強い表現でも、場面によって許容度が変化するこ

とが多い。決定的に反社会的な表現と言えそうなものは「死ね」であるが、その他のものが使われた場合では、どんな表現が用いられるかということだけから、罵りのランクを考えることが難しい。好ましいイメージをもつ「おまえの母さんデベソ」「あほ」などに於いても、同時に「嫌い」や「悪い言葉」という数値も高く、好意を表す行動に用いられるばかりではない、という複雑な状況の一端がうかがえる。

罵りの許容度を左右する条件の一つに、「表現が当てはまる状況が存在すること」がある。先のアンケートで、「どんな場合ならこのような表現を使ってもよいと思うか」という設問に自由回答で答えてもらった。「気心の知れた者同志の場合」というのは、日本語話者、中国語話者に共通した回答だが、「本当に相手がどじを踏んだとき」などの内容の回答は、とくに日本語話者に目立った。

すると、日本語における罵りの典型的な型のひとつは、対象が何か失敗をしたときや、能力が劣っているとき、それをあげつらうこと、ということになるのではないだろうか。そのような形で罵りが行なわれるとき、話者が優位に立ち、対象を見下す、という構図が見られる。すると、そこで「冷たい」というイメージが強くなることは首肯できるのである。「生気のない感じ」がやや強い、ということも、同じ土俵にたって対決する、という姿勢の弱さを反映している。

また、攻撃されるほうの感情としては、自分が劣っている、あるいは失敗をしたなど、確かに、攻撃される「正当な」理由を有しているのであるから、腹も立つし、侮辱も感じるが、まず、悲しくなる、という消極的な感情が強くなるのであろう。

中国語の罵りでは、「神経病」に日本語と似た特徴が認められたが、その他の多くの表現は、相手の欠点を具体的に指摘することなく、タブーを犯すような表現の迫力によって相手を攻撃している。中国語の罵りは、状

況の緊迫度などによって、どれくらい反社会的な表現を用いるのかが決定されるようである。

5　おわりに

今回は日本語と中国語の罵りを考えるために、7つの表現を選んで、調査を行なった。この結果がどの程度まで一般化できるか、という問題はあるが、両言語に於ける罵りの一面を明らかにすることができた。

さて、今回は罵りに用いられる表現からの考察を試みたわけであるが、言語行動を考える際に、使われる表現以外の要素として、どんなものを考えればよいのか。また、日本語と中国語以外の言語ではどうなっているのか。将来は、罵りだけでなく、悪口行動全体を覆う研究に拡大することも必要である。今後の課題は多い。

〔アンケートの集計、分析には大阪大学大型計算機センターにて、統計パッケージ・ＳＰＳＳ＃R9.15 を使用した。〕

注

1) 日本語に於いては狭義の敬語の形式（例えば、いらっしゃいます、ご存知です、等）を用いることによって、対象を持ち上げていることを表わすことができる。しかし、内容はこれらの形式より重要である。敬語形式を用いているが、悪口である、というような表現は当然、考えられる。
2) 「母親の」の後には、性器を表わす言葉が省略されている、という説と、全体で、「おまえの母親を犯すぞ」という意味だ、という説があるが、民間語源説の域を出ない。
3) 実際に出現した表現のうち、例えば「ばか」「ばかったれ」「ばかやろう」などは、バリアントとみなした。
4) 無論、どんな状況がそれに当たるのか、という問題は残っている。

参考文献

浅田芳子（1979）「悪口の社会言語学的一考察」F. C. パン・堀素子編『言語社会学シリーズ No. 2 ことばの諸相』

荒井芳広（1981）「悪態行為論—戦略的相互作用としての悪態—」『講座日本語学 9』

Brown, P. & Levinson, S. (1987) *Politeness: Some Universals in Language Usage.*

星野命（1971）「あくたいもくたい考」『季刊人類学』 2-3（『現代のエスプリ』85（1974）再収）

（1978）「現代悪口論」『言語生活』321

井出祥子（1986）『日本人とアメリカ人の敬語行動』

海保博之（1986）『心理・教育データの解析法10講（基礎編）』

Leech, G. (1983) *Principles of Pragmatics.*『語用論』池上嘉彦・河上誓作訳 1986.

三宅一郎・山本嘉一郎（1976）『SPSS 統計パッケージ I 基礎編』

付記

アンケート調査に際しては、多くの方々の御協力をいただいた。とくに以下の団体の方には大変お世話になった。ここに重ねて感謝の意を表するものである。

（50音順）

大阪外国語大学

大阪大学中国人留学生とその家族の方々

大阪府立刀根山高等学校

北野日本語学校

京都中国帰国者友誼会

（大学院後期課程学生）